

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月15日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520687

研究課題名（和文）幕末維新时期における北信生糸流通に関する基礎的研究

研究課題名（英文）A Basic Study on Raw Silk Distribution in Ueda-Chiisagata Area in Shinano Province in Late Edo Period and Early Meiji Period

研究代表者

井川 克彦（IKAWA KATSUHIKO）

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号：50243803

研究成果の概要（和文）：江戸後期において上田小県地方は生糸主産地の一つであり、その生糸は前橋の生糸市に集荷され、桐生などの絹織物の原料となった。横浜開港後にその生糸生産はさらに拡大して明治を迎えたが、この地方では器械製糸業がなかなか勃興しなかった。上田商人や生糸流通構造の実態を明らかにすることに努めた結果、養蚕と結合した農家小商品生産の部厚い存在、買い集める上田生糸商人の資本基盤の小ささを見通すことができた。

研究成果の概要（英文）：In Late Edo-Period, Ueda-Chiisagata Area in Shinano Province (Nagano Prefecture) was a producing center of raw silk. Ueda Raw Silk was used to be send to Maebashi-Town in Kozuke Province (Gunma Prefecture), transacted at the market there, and made Silk Cloth by Kiryu Textile Manufactures. But, in Meiji-Period, this area took more time than one expected to develop the modern Reeling Industry. Producing raw silk there depended on a large number of small farmers who did silkworm raising and silk reeling, and the funds of Ueda-Town Silk Merchants were little.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：信濃、長野県、上田、小県、生糸、製糸業

1. 研究開始当初の背景

(1) 蚕糸業史研究

1876年頃からの長野県諏訪郡器械製糸業の勃興・突出的発展を説明すべく、諏訪郡岡谷地方をフィールドとする蓄積（矢木明夫・北島正元ら）があり、同地方における農民層分解の進展が指摘されている。しかし、諏訪と対比すべき非勃興地域についての研究蓄積は甚だ不十分である。また、日本の近代製

糸業の発展の一要素となった横浜売込商を中心とする流通・金融システムの成立の歴史的意義を評価するためには、横浜開港前の生糸生産・流通の実態を、とりわけ東日本の養蚕・製糸主産地の商人・生産農家の実態を明らかにする必要がある。以上の視角からは、江戸後期に前橋周辺に次ぐ生糸主産地であり、器械製糸業勃興が遅滞した上田・小県郡をフィールドとした研究が有効である。

(2) 上田・小県地方史研究

同地方については、「大正デモクラシーから戦時体制へ」という変化を見せた代表的な地域であることに注目した農村社会運動的視点からの部厚い研究（中村政則・鹿野政直・西田美昭ら）があり、また近年において日本有数の蚕種生産地となった旧上塩尻村についての研究（とくに現在東北大学長谷部弘氏らの共同研究）がある。しかし、上田町商人らの活動をはじめとする近世期経済の実態や、明治期養蚕経営の展開の様相については、ほとんど解明されていない。この地方の社会経済の近世・近代を俯瞰した位置づけが必要とされている。

2. 研究の目的

本研究は、江戸期から明治期への過渡期における上田・小県地方の生糸流通とその基盤となった商業・金融網を実証的に解明することを目的とする。主たる史料としては、上田市丸子地区の吉池家文書・飯沼区有文書と上田市立博物館保管文書の中核として用いるが、同地方の江戸後期・明治初期の経済史関係史料の伝存状態そのものを把握することも一つの課題とせざるを得ない。なぜなら現状において同地方について利用が容易な資料は上田市立博物館保管の史料群であるが、その多くは上塩尻村の蚕種業者関係のものであり、上田商人や生糸産地の生産・流通に関わる史料、とりわけ帳簿類はほとんど発掘されていないからである。

3. 研究の方法

(1) 関係史料伝存の確認・収集

- ①上田市立博物館
- ②飯沼区有文書（吉池家文書）
- ③その他県庁文書・役場史料など

(2) 上記史料の分析

- ①上田商人関係（原町問屋日記・同滝沢家文書・上田町呉服商成沢家史料（とくに為換手形類）
- ②吉池家史料
- ③共進会出品繭・生糸申告書（県庁文書）

4. 研究成果

戦後の上田市史編纂事業に際して、数人の江戸期の上田商人についての調査・収集（マイクロ撮影）が行われていることが判明したが、それらは公開されておらず、今後の課題とせざるを得ない。上田商人については戦前の『上田市誌』レベルにとどまっているのが現状である。

このような状況下、基礎的作業として「原町問屋日記」に記載された上田藩産物改めに関わる改め量と判銭（改め手数料）の記載を確認した（「原町問屋日記」の利用にあたっては、東北大学長谷部弘・愛媛大学高橋基泰

氏らの協力に拠る所が大きい）。この数字は従来『上田市誌』に断片的に記載されたものしか知られていなかったが、網羅的に同史料に当たった結果、毎年とまではいかないが、天保4～文久2年における趨勢を把握することができた（この数字は後出の井川「横浜開港前における上田小県地方の製糸業」に掲載）。横浜開港後に上田藩領の生糸生産量は大きく増加し、前橋には及ばないものの、諏訪藩域の生産量を上回ったと目される。明治5年以降輸出向け蚕種生産が縮小するまでは、小県郡全体として（使用繭量に換算して）蚕種生産の比重が生糸生産より大きかった。しかし、生糸主産地である塩田平や上田藩外の依田地方では生糸の方が大きかったと推測できる。

このような小県郡において諏訪地方のような器械製糸業勃興が見られなかったのはなぜかについて研究史は十分な説明を与えていない。この点については、明治初期までの小県郡製糸経営の状況を明治13年共進会申告書から把握する限り、諏訪地方における座繰集合作業場の普及に対して、小県郡における養蚕製糸一貫の農家小商品者的経営の圧倒的存在が解答となるであろう（後出井川「明治期における上田小県地方蚕糸業の展開」、同「諏訪器械製糸業勃興に関する統計的再検討」）。

江戸期の小県郡の生糸商人については依然不明な点が多いが、重要な事実が発見できた。

第一に、上田商人の地位が大きくはないであろうこと。その筆頭である万屋平八（万平）らは開港前から岩村田藩領飯沼村吉池文之助家に日常的に資金融通をしてもらっている。

第二に、上田藩領の生糸の多くが依田地方に流れて前橋へ出荷されていたこと。従来知られていなかった依田地方の長瀬村の生糸市がその中心であり、これに対する規制強化を目論む上田藩に対し上田商人らは消極的で非協力的であった。

第三に、そもそも小県郡の生糸生産の発展は、北関東織物業拡大の結果たる前橋生糸市（上州商人）への出荷を決定的な要因としていた。吉池家は上州商人からの生糸販売代金の一部を上田商人が取り扱う為替で受け取っていた。主として先行した織物取引の展開によって形成された為換網を利用してこのような生糸取引の発展がなされたと思われる。また岩村田藩の江戸屋敷への送金も吉池家・上田商人の民間取引に依拠した「御為替」によって為されていた（この為替関係については未発表）。

共同研究への参加者（研究協力者）がその成果の一部を執筆した書籍を刊行した。その概要は次の通りである。

①阿部勇・井川克彦・西川武臣編『蚕都信州上田の近代』（岩田書院、2011年12月刊）。

井川克彦「横浜開港前における上田小県地方の製糸業」。共進会申告書（長野県庁文書）・上田原町問屋日記・同滝沢家文書を用い、文化期の前橋向け「提糸伝習」事業という上州商人の生糸仕入地開拓を契機とする同地方製糸業の展開を追い、先行した蚕種生産と生糸生産との量的比較および上田商人と上田藩外依田地方との関係の一端を明らかにした。

西川武臣「横浜開港と生糸売込商中居屋重兵衛」。吉池家書簡〔飯沼区有文書〕・上田商人胤屋伊藤林之助江戸横浜日記・原町問屋日記を用い、開港直後の横浜でもっとも多く生糸を輸出した売込商中居屋重兵衛の開店直前から閉店に至る活動を分析したもの。中居屋については、これまで経営実態を分析できるような資料が見つからず、「謎の売込商」と呼ばれてきたが、近年、これらの上田小県地方などの新発見史料をもとに、中居屋が開港直後から大量の生糸を集荷できた要因を明らかにした。また、幕府の貿易政策が中居屋の経営にどのような影響を与えたのかについても分析した。

小林延人「明治初年における上田藩の贋金問題と紙幣流通」。上田市立博物館所蔵「竹内憲三家文書」「尾崎正弘家文書」などを用いて、明治初年に贋金と藩札が地域に与えた影響を考察。贋金の流入によって地域の貨幣供給は危機に瀕し、二分金騒動が発生したが、その対策として発行された上田藩札を始めとする地域通貨が貨幣需要に応じたため、上田地域の主力産業である蚕種業の成長は金融閉塞によって制限されなかったと結論付けた。

井川克彦「明治期における上田小県地方蚕糸業の展開」。共進会申告書を主史料として、明治初期の同地方の製糸業における小商品者の経営の圧倒的存在を示し、また改良座繰の挫折について検討した。

土金師子「明治期養蚕法の展開と小県郡」。明治前期の共進会申告書は、繭の出品繭各々につき養蚕法、栽桑法、販売価格など個人の養蚕記録を詳細に記している。これを分析して、明治前期の小県郡の養蚕業の変化を技術的に追跡。明治前期には、飼育温度の異なる「温暖育」、「清涼育」、「折衷育」の選択が当業者間で関心の的となる中、1889年に農商務省の「養蚕標準表」が公表され、「折衷育」が全国で一般化するが、同郡ではそれ以前に種繭養蚕由来の「清涼育」を基礎にした「折衷育」が広がり、糸繭養蚕を展開していた。同郡の飼育技術は、収繭量確保・違蚕の防止・中程度の繭質確保、という点で、「養蚕標準表」と目的が同じであり、その完成度は高く、県内における収繭量も上位を保つこと

ができたと評価できる。

②奥村栄邦・阿部勇・日本女子大学西川井川ゼミ編『飯沼区有・名主吉池家書簡目録』（第1分冊・第2分冊、A4判計265頁、2012年1月22日発行、発行部数50、上田市立図書館・同博物館・長野県立図書館・同歴史館・飯沼区ほか共同研究関係者に配布）。

共同研究の多大な時間と経費を投入し、小県郡飯沼村名主をつとめた吉池（文之助）家に残された江戸後期の書簡約4千通を整理し目録化した。このうち、共同研究のテーマに直接関わる上田商人（万屋長岡万平・鼠屋伊藤林之助ほか）書簡や横浜開港後の江戸横浜書簡などが約200通あり、中居屋重兵衛関係の書簡もある。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

①井川克彦、諏訪器械製糸業勃興に関する統計的再検討、史艸（日本女子大学史学会研究会発行）、査読無、51号、2010、115-136。

②井川克彦、明治初期の諏訪地方における生糸取引（1）—清水久左衛門家帳簿の再分析—、日本女子大学紀要文学部、査読無、第60号、2011、133-148

③井川克彦、2011年度シンポジウム「戦前期長野県養蚕業と地域—小県郡と下伊那郡」趣旨、農業史研究、査読無、2012、1-2

〔学会発表〕（計2件）

①井川克彦、蚕糸業と上田小県、上田市立博物館主催記念講演会、2009年10月4日、信州大学繊維学部講堂

②井川克彦、「2011年度シンポジウム戦前期長野県養蚕業と地域—小県郡と下伊那郡（組織者井川克彦）」趣旨説明、日本農業史学会研究報告会、2011年6月11日、東京大学農学部。

〔図書〕（計1件）

①阿部勇・井川克彦・西川武臣、岩田書院、蚕都信州上田の近代、2011、13-36・99-124

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井川 克彦 (IKAWA KATSUHIKO)

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号：50243803

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

長谷部 弘 (HASEBE HIROSHI)

東北大学大学院経済学研究科・教授

研究者番号：50164835

(4)研究協力者

阿部 勇 (ABE ISAMU)
上田市博物館協会会長
研究者番号なし

奥村 栄邦 (OKUMURA SHIGEKUNI)
上田市飯沼区古文書研究会
研究者番号：なし

西川 武臣 (NISHIKAWA TAKEOMI)
横浜開港資料館副館長
研究者番号：なし

小林 延人 (KOBAYASHI NOBURU)
日本学術振興会特別研究員
研究者番号：なし

高橋未沙 (TAKAHASHI MISA)
日本女子大学文学部学術研究員
研究者番号：なし

土金師子 (TUCHIKANE KAZUKO)
日本女子大学文学研究科後期課程
研究者番号：なし